

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 28 年 5 月 24 日現在

機関番号：24403

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25380748

研究課題名(和文) 精神保健福祉領域における利用者主導型の職員研修プログラムの開発

研究課題名(英文) Developing a Consumer-Run Educational Program for Mental Health Professionals

研究代表者

松田 博幸 (MATSUDA, Hiroyuki)

大阪府立大学・人間社会学部・准教授

研究者番号：30288500

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、精神保健福祉サービス提供組織をリカバリー志向のものに変えるための利用者主導型の職員研修プログラムの開発を目指すものである。北米においては、精神障害当事者が自らの手で生み出したプログラムが展開されている。本研究においては、アメリカ等において展開されているemotional CPR (eCPR) に着目し、それがどのような原理に基づいて成り立っているのかを明らかにした。そして、わが国においてeCPRの研修を開催し、研修参加者の体験を分析することによって、利用者主導型の職員研修プログラムを開発するための課題を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：This study aims to develop a training program for mental health professionals that is created by people with lived experience. In North America, a variety of programs developed by people with lived experience have become prevalent among them. In this study, focusing on emotional CPR (eCPR), the educational program that helps people to learn how to support a person in crisis, the principles of eCPR are described and the way of developing a training program for mental health professionals created by people with lived experience is explored.

研究分野：社会福祉学

キーワード：職員研修 当事者活動

### 1. 研究開始当初の背景

(1) 北米においては精神障害当事者自らの手による活動や運動が展開され、そのなかで様々なプログラムが開発されてきた。たとえば、ピアサポートのためのもの (Intentional Peer Support など)、リカバリーのためのもの (Wellness Recovery Action Plan など)、クライシス対応のためのもの (ピアラン・レスパイト) があつた。そして、それらのなかには、当事者のみならず、支援者を教育するためのものもあつた。その一つが emotional CPR (eCPR) である。eCPR は、クライシスにある人に対して周囲の人々がどのように関わればよいのかを学ぶための教育プログラムであり、対象者のなかには専門職者も含まれている。

(2) 近年、わが国の精神保健福祉領域においてリカバリー概念が注目されるようになり、精神保健福祉サービス提供組織をリカバリー志向のものに変えるための課題が追究されるようになった。そのような課題の重要な一つとして、職員研修の質を向上させることがあげられる。研究代表者は、(1) で言及したような利用者主導型の研修プログラムが研修の質の向上において重要であると考えた。

### 2. 研究の目的

(1) eCPR がどのような原理を基に成り立っているのかを明らかにすることを通して、職員研修が利用者主導であることの意義を探究する。

(2) eCPR の研修に参加した人たちが体験した変化を明らかにすることを通して、わが国において利用者主導型の職員研修プログラムを開発するための課題を明らかにする。

### 3. 研究の方法

(1) 文献収集及び現地訪問によって、eCPR を含む、当事者の手によって生み出され、普及されているプログラムに関する情報を収集した。

(2) eCPR の研修をわが国において開催し、参加者からのフィードバックを得、参加者がどのような変化を体験したのかを分析した。

#### eCPR 研修について

eCPR の普及をおこなっている National Empowerment Center (アメリカ、マサチューセッツ州) より 2 名の講師を招き、2015 年 5 月 18 日および 5 月 19 日に 2 日間の研修を実施した。いずれの日についても、9:00 から 17:30 まで、大阪市内において実施された。内容は、eCPR に関する短いレクチャーとロールプレイから構成されていた。なお、英語版のワークブックを研究代表者が翻訳し、参加予定者全員に日本語版を事前に配布した。

#### 参加者について

参加者は研究代表者が選定したが、とくに厳密な基準は設けず、eCPR に関心を持ちそうな知り合いに声をかけた。最終的に研究代表者を含めて 20 名が参加予定となった。そのうち、1 名については、eCPR のホームページに掲載された情報をもとに本研修のことを知り、参加を申し込んだ者であり、今回の研修以前に面識はなかった。

研究代表者を除く参加予定者 19 名のうち、研究代表者の知る限り、9 名はセルフヘルプ・グループ (精神障害当事者のグループ、アディクションのグループ、引きこもり体験者のグループ、精神障害当事者の家族のグループ) に参加している、あるいは、参加していた人たち (以下、SHG 体験者) であつた。SHG 体験者ではないと思われる精神障害当事者は 3 名であつた。また、19 名のうち 7 名は、精神保健福祉領域において支援者として活動をおこなっており、その 7 名のうち 4 名は SHG 体験者でもあつた。3 名が大学の研究者であり、残りの 4 名は、精神障害当事者 1 名、および、その他 3 名 (属性を明らかにしなかった者 2 名、精神保健福祉以外の領域の支援者 1 名) であつた。eCPR 研修には研究代表者を除いて、以上の 19 名が参加する予定であつたが、3 人が欠席し、実際に参加したのは 16 名であつた。

16 名のうち、2 名については 1 日のみの参加であり、2 名については数時間のみの参加であつた。

#### 質問紙について

2016 年 4 月下旬からトレーニング開始時まで、研究代表者を除く参加予定者 19 名に対して「事前アンケート」を配布した。また、eCPR 研修実施後、およそ半年の時点 (2016 年 11 月下旬) において、研究代表者を除く参加者 16 名に「事後アンケート」を配布した。配布方法は、直接の郵送あるいは手渡し、そして、人を介した郵送あるいは手渡しであつた。質問紙と返信用封筒を同封し、仮名を記した用紙が回収された。「事前アンケート」の回収数は 12 枚 (回収率 63%)、「事後アンケート」の回収数は 11 枚 (回収率 69%) であつた。

「事前アンケート」「事後アンケート」ともに仮名で回答してもらうことによって、匿名性を守りつつ、両回答者の間の同一性がわかるようにしたところ、10 名が両方のアンケートに回答したことがわかつた。

質問内容は以下の通りであつた。

#### <事前アンケート>

- ・なぜ今回の eCPR のトレーニングに参加しようと思ひましたか。
- ・情緒・感情的なクライシス (危機) にある人に、他の人が関わる際に何が大切だと思ひますか。あなたの考えを自由に述べてください。

・今回のトレーニングについて考えておられること、感じておられることを自由にお書きください。

<事後アンケート>

・今回のトレーニングに参加されてどのような感想をお持ちですか。

・情緒・感情的なクライシス（危機）にある人に、他の人が関わる際に何が大切だと思いますか。あなたの考えを自由に述べてください。

・わが国における今後の eCPR のあり方について何かご意見があればお聞かせください。

4. 研究成果

(1) 当事者の手によって生み出され、普及されているプログラムに関する情報

ピアラン・レスパイト憲章

アメリカにおいては、ピアラン・レスパイト (peer-run respite) と呼ばれる、当事者運営のクライシス・センターが活動をおこなっており、アメリカ国内で 17 ヶ所にあるとされている (2014 年 9 月時点。National Empowerment Center のウェブサイトより)。2014 年 7 月 24 日から 27 日まで、アメリカ、コネチカット州のリッチフィールドで開かれた、国際的なアドボカシー団体、MindFreedom International の大会にて、「ピアラン・レスパイト憲章」が発表されたが、「基本的権利 (Basic Rights)」「環境的要因 (Environmental Factors)」「人びとの関係の質 (Relationship Qualities)」「そこで働く人たちの質 (Qualities of People Who Work There)」を基本的な枠組みとするものであった。憲章そのものは暫定的なものであったが、医療モデルからの解放、自分(たち)のことは自分(たち)で決定すること、人と人との人間的なつながりに価値を置くという、北米の当事者運動において培われてきた特徴をもつ場としてピアラン・レスパイトがとらえられていることがわかった。

eCPR

eCPR は、人がクライシスの状態にあるときに、周囲の人たち (友人、家族、近隣の人、専門職者、警察など) がどのように本人に関わればよいのかを身につけるための教育プログラムである。アメリカで 2008 年に精神障害をもつ当事者の手によって作られた。それ以前に、2001 年にオーストラリアで作られた Mental Health First Aid がアメリカに紹介されていたが、それが診断名にこだわった医学モデルに基づくものであることに違和感をもった当事者たちが自らの手で生み出したのが eCPR である。CPR という語は、つながること (Connecting)、エンパワーすること (empowering)、蘇生させる (Revitalizing) という 3 つの過程を表すと同時に、心肺蘇生法 (CPR) という意味をもつ。つまり、ある

人がクライシスにある際に、周囲の人が本人とつながり、エンパワーし、蘇生させるようなかわりをすれば本人は情緒・感情的に息を吹き返すが、そのようなかわりがないと命を落とすことにもなるということである。

eCPR においては、トラウマ・インフォームド・アプローチ、対話、リフレクションといったことに価値が置かれ、クライシスにある本人と情緒・感情的なつながる方法を身につけることが目指されている。(National Empowerment Center 2014=2015)

(2) eCPR 研修参加者が体験した変化

以下、「事前アンケート」および「事後アンケート」に記入されていた回答を示す。対象となった回答用紙は 23 枚であった。「事前アンケート」が 12 枚、「事後アンケート」が 11 枚であったが、両方に回答した者は 10 名であった。両方に回答した者に対しては無作為に A から J までのアルファベットをあて、残りの「事前アンケート」回答者に対して無作為に K と L をあて、「事後アンケート」のみの回答者には M をあてた。

<参加動機>

「なぜ今回の eCPR トレーニングに参加しようと思いましたか」という問いに対する答えを見ると、自分自身のためという理由と他の人のためという理由を同時に示している者が 4 名いた。たとえば、以下のような回答が見られた。

私自身のリカバリーに向けて、1 つのきっかけ、大きな一歩になるかもしれないと思ったため。先々、今回学んだことを活かしてサポートを提供できるようになればと思っています。(G さん)

まず自分自身の為であり、仲間の為に何か役立つ事が学べると思いました。(H さん)

また、近年精神保健福祉分野で注目されている海外のアプローチ(「オープンダイアログ」)から関心から、あるいは、海外のアプローチが「輸入」されることで形が変えられてしまうことの危惧から参加したという者もあった。

映画「オープンダイアログ」を見た流れで eCPR を知り、興味を持った。(L さん)

日本に「輸入」されることがあれば「どう改造」あるいは改悪されていくのか、とても心配していますが「直輸入品(オリジナル)」がなければわからないので。(J さん)

<研修の効果>

研修を通して参加者がどのように変化したのかを明らかにするために、「事前アンケート」「事後アンケート」の両方に回答した

10名について、それぞれにおける「情緒・感情的クライシスにある人に他の人が関わる際に何が大切だと思うか」という項目に対する回答（以下、「研修前クライシス意見」「研修後クライシス意見」）の間の変化に焦点をあてた。そして、その際に、それぞれの回答者の「事後アンケート」における「今回のトレーニングに参加されてどのような感想をお持ちですか」に対する回答（以下、「感想」）も参照し、回答者の変化を浮かび上がらせた。その結果、研修の参加者のなかに以下の3つの変化を体験した者がいることがわかった。

感情に焦点をあてるようになった

研修に参加する前のコメントにおいては感情に関する記述がなかったが、研修後のコメントにおいては感情に関する記述がみられる。また、参加者が研修のなかで感情をめぐって体験をしたことがうかがえる。

Aさん

「研修前クライシス意見」

その人にとっての安全とは何かを考え、確保し、伝える。

「研修後クライシス意見」

自分自身の感情を照応させながら、切り開いていく時間を共有することかなと思います。

「感想」

支援者と被支援者の間に横たわる溝のようなものが埋められていくプロセスを、理屈ではなく、感情的な体感として経験できました。

Bさん

「感想」

とても感情をゆり動かされ、大変疲れしました。又、同じ時間を共に過ごした方達と、深い関係を短い時間の中でしたが、築けたような感じがしました。

Eさん

「感想」

自分が今までの人生でいかにたくさんの感情をとらえて抑えこんで生きてきたのかという事を実感しました。

クライシスにある人に対してより積極的な関わりを考えるようになった

研修に関わる前は、クライシスにある人と距離を置き、消極的な姿勢をとることを考えていた者が、研修後は自分自身との関わり、クライシスにある人との関わりなど、積極的な関わりが必要であると考えようになった。また、クライシスにある人に関わる際に大切なことについて、研修後の記述のほうが、研修前のものに比べより具体的になっていることもうかがえた。

Cさん

「研修前クライシス意見」

特に何の訓練も受けていない人やスキルがない人の場合、クライシスにある人と接すると、よりクライシスを強めてしまう（相手を孤立させてしまう）ことがあります。現在私がクライシスにある人と接する際に心掛けているのは、「傷を悪化させない」ことです。何か相手にプラスを与えることは難しいので、コミュニケーションによってマイナスにならないことを心掛けています。

「研修後クライシス意見」

相手を感じることも、又、クライシスの状態の人と接する自分の心の動きについても感じることがまず大切であると思いました。

上記のことも含めてのことですが、eCPRを実際の場面でおこなう際には、ある種の「努力」が必要になると思いました。（略）相手を感じたり自分を感じたりという「努力」ですが、経験を積み「自然」に行えるようになるのかとも考えます。

Dさん

「研修前クライシス意見」

情緒・感情的なクライシスは、困難な状況を体験し、その反応として混乱している状態だと思います。（略）共に苦しみをわかちあうことが、第一に大切なことであり、そういった他者の苦しみを感じとれる感性を磨くことが大切だと思います。

「研修後クライシス意見」

「症状」を診断し、対処法を提案するのではなく、また激しく揺れ動く感情を抑え込もうとするのではなく、孤独の真只中にある人と共にいること、対話し、感じ、響き合うつながりこそが、最も大事なことだと思います。（略）「モノログ」の中にいる人を対話の世界へ「導く」のではなく、波長を合わせて、「一緒に居る」ということ。

Fさん

「研修前クライシス意見」

クライシスにある人に、さらにクライシスな状況に追いやるような対応をしないことがまず大切だと思う。（略）そして、かかわる人自身が安定していることが大切だと思う。過度に共感的であったり、揺れ動きやすかったりといった人は、クライシスにある人の影響を受けてしまって、その人自身をクライシスにしてしまう可能性がある。「どっしり」と構えていることが大切なのではないだろうか。

「研修後クライシス意見」

まず、そばにいること、そばにいるよと伝えること、決して一人でないと伝えることが大切ではないかと思う。クライシスにある人が発した言葉の全てに耳を傾け、言葉だけでなく身体から発せられるもの（仕草、息づかいなど）にも関心を持ちつづけることも必要

ではないかと考える。そして、「私の」感情、メッセージを伝えることも不可欠であるように思う。

従来の一般的なアプローチとは異質なものであるということに気づいた

参加者が、eCPR は精神保健福祉領域における従来の一般的なアプローチとは異なるということに気づいたということがうかがえた。たとえば、B さんの記述においては、研修前のコメントと研修後のコメントを比較すると、前者が、専門職者が一般的に用いる表現となっているのに対して、後者のほうは、そこから外れたより情緒的なものとなっている。

B さん

「研修前クライシス意見」

対話による早期介入が、回復を早めたり、重症にならないために必要なことだと考えます。対話の方法については、一定のスキルを身につける必要がある様に思われます。

「研修後クライシス意見」

“受け入れる”ことじゃないでしょうか。

「感想」

とても感情をゆり動かされ、大変疲れました。又、同じ時間を共に過ごした方達と、深い関係を短い時間の中でしたが、築けたような感じがしました。

F さん

「感想」

精神保健福祉領域において支援者が行うアプローチとは全く別のものであると感じた。

(3) 利用者主導型の職員研修プログラムを開発するための課題

近年、精神保健福祉分野においては、フィンランドの西ラップランドにおいて実践が展開されている、クライシス対応アプローチ、Open Dialogue (以下、OD) が大きく注目されている。OD は、専門職者のチーム(2、3名)が、クライシスにある本人の自宅等を訪問し、本人に加えて、関係者(家族、友人など)とともに対話をおこなうアプローチである。国内においても研修会等が開かれるようになり、今後、広がりを見せると考えられるが、eCPR を通して、OD の限界が見えてくる。

eCPR と OD とを比較すると共通する部分が多い(対話を通じたアプローチ、リフレクティング・チームの活用など)が、大きく異なるのは、eCPR が情緒・感情に焦点をあてたアプローチであるという点である。そして、そのような違いは、OD が専門職者主導で展開され、eCPR がクライシスを実際に体験した当事者によって展開されてきたという成り立ちと密接に関係していると考ええる。eCPR は、当事者による生きられた経験(lived experience)を通して生まれたものであるが

ゆえに情緒・感情に基づく人と人とのつながりを強調するものになっているということができらる。この点については、ピアラン・レスパイトをはじめ、当事者が生み出したアプローチにおいて共通する特徴である。

今回の研究においては、わが国において開催された eCPR 研修会の参加者がどのような変化を体験したのかを探究したが、そこにおいても、参加者が、クライシスにある人に対して積極的な姿勢をとるようになり、かつ、そのような新しい姿勢は情緒・感情に対して開かれたものであることが浮かび上がってきた。

eCPR が生み出す文化は、理性や理論を重んじる専門職者の文化とは異質なものである。OD に対する関心の高まりを見ると、今後、精神保健福祉領域においては、専門職者に対して対話の能力やスキルが求められるようになってくると考えられるが、その際に、当事者が育んできた、情緒・感情に価値を置く文化をどのように意味づけるのかが重要な課題となるだろう。

<参考文献>

National Empowerment Center, 2014, *Assisting People through Emotional Crisis: Participant Workbook*, Lawrence, MA: National Empowerment Center (=松田博幸 訳、情緒・感情的なクライシスにある人びとを支える: 参加者用ワークブック、2015)

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

松田博幸、当事者の手によって作り出されたクライシス対応アプローチ、ゆうゆう、査読無、No.68、2014、p.44-47

〔学会発表〕(計1件)

松田博幸、ソーシャルワーカーが自らの生の過程と向き合う専門性、日本社会福祉学会第61回春季大会シンポジウム「当事者と向き合う専門性とは何か」、2013年5月26日、東洋大学 白山キャンパス(東京都)

〔図書〕(計3件)

松田博幸 訳、情緒・感情的なクライシスにある人びとを支える: 参加者用ワークブック、2015、77 (原著 National Empowerment Center, *Assisting People through Emotional Crisis: Participant Workbook*, 2014 改訂版)

松田博幸 他、ミネルヴァ書房、社会福祉実践における主体性を尊重した対等な関わりは可能か: 利用者 援助者関係を考える、2015、267 (123-150)

松田 博幸 他、NPO 法人 SAN Net 青森、  
グループホームという生きるかたち：ともに  
語り、暮らしあう試み、2014、140 (12-37)

〔産業財産権〕  
出願状況 (計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況 (計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

松田 博幸 (MATSUDA, Hiroyuki)  
大阪府立大学・人間社会学部・准教授  
研究者番号：30288500

##### (2) 研究分担者

なし

##### (3) 連携研究者

なし